



君の代は久しきこと久しき事免しき事
未だ亦未だ其民茶を花ゆり市実生
てお少くもそふの中禮定りみりてを
括ふの子なく嫁形くして妻を定るるの
をばりま嫁姻の式を調ふも嫁上古き
と至今にあり神祇園のたへんは物
上中終るに上はうを礼を寄し記し
未の事なまうそはた存んたふく
男に礼を寄しはりし事記し
たれ禮は其の終るもたれ禮を



賤くして考を品をけしむハ奢新也其國
 の神乃抑へえ正直との御人是なるを
 いましぬあふなる一遠を聖乃國を
 希紀金仙氏のたへえを此ははかるハ
 出はるはか

冬 辭 雅考

小督局の御念院よりして
 世にまこと争の上は
 心をあふして憂はるる
 神の御心をかへつて
 ついでに好てあやまき
 語らば言はれん
 人の心はあやまき
 神んぞ万をさるは
 君もいへたれ
 心はあやまき
 向相寄の女房もあやまき
 他人もあやまき
 あやまらあはれか
 くるりさびく
 予のあやまき



くるりさびく
 予のあやまき



稲田姫の家
 榎脚磨乳の
 大蛇の人は供は
 大蛇の人は供は
 大蛇の人は供は

大蛇の人は供は
 大蛇の人は供は
 大蛇の人は供は

大蛇の人は供は



河津の
秋月

かき浦の
舟

川原の
舟

まき井の
流



出雲國大社
八景

寂蓮法師

やうき
まや
ふらねん
くま
り

八雲の
時

社頭
夜燈

八雲の
おま
松

ま
子
鳥



十月、諸國の神々、出雲の大社に
 ありて、後、形、國守、男、女の
 ありし、心、を、あ、た、め、候、ひ、と
 び、と、き、知、り、を、あ、れ、を、思、ひ、
 を、皆、神、の、定、め、を、ま、へ、
 事、か、ま、さ、ば、夫婦、の中、の、
 大、切、な、れ、あ、り、と、い、ひ、
 嫁、し、て、い、つ、と、い、つ、候、さ、く、
 や、り、ま、じ、む、ら、び、男、姑、と、
 こ、か、親、い、ら、も、ま、り、て、
 厚、く、愛、し、し、ま、ぬ、い、孝、
 行、を、盡、し、下、勤、あ、ま、さ、
 り、に、い、つ、も、自、
 親、勤、と、あ、り、勤、め、
 と、た、た、下、女、に、
 た、ふ、候、を、け、何、事、も、
 別、ま、に、ま、い、守、り、
 新、松、舟、の、い、い、い、
 目、も、さ、く、榮、へ、り、と、い、ひ、

古今和歌集三巻

三本之傳

一海賀玉の本

三芳那の

右孫の

うのい出る

あをさう玉の

きぬと

えゆる蘇

此方、依、も、東、久、世、博、多、郷、の、
 後、京、極、持、政、大、政、大、持、

雪

志、り、い、

い、ら、ま、

い、ら、ま、

い、ら、ま、



流、り、ぬ、お、ふ、乃、唐、の、祓、さ、り、た、
 さ、と、な、ま、乃、す、の、月、の、

花

昔、り、れ、は、様、の、持、持、り、て、
 昔、孫、を、花、れ、ぬ、り、り、と、

一わごんりぐうしん
さふとつふ事

ふねねまよ

あづげ

さらま

ふりみ

おの

あふゆも

のり

一かまの草ねり

むごむれ

まよゆい

あふまよ

あふま

あふま

あふ

あふ

雪

雪に我法は布て出りて

こころのりつと人やこころん

月



更中

雪の

果

果

果

花

長果しと何とむ

終て極志あり世なりて



新大僧正

雪

雪のぼるれよさめれ

月よえがりの天れかぐや

月

石は水に白玉

丁る月

雪

雪

雪

雪

雪

雪

春の



皇太后

三巻の傳

一白らざりれる

りらざり

さげの春

おびしめ

あしゆまはしめ

家ど

ゆりゆく

雪 西行法師



ありそ人の

月

ありそはト雲と出づな

いろそめは秋の夜

花

しるくさるる花は

ふゆのこころ

一嘆まどられる

遠近の

あしき

あしめ

ふゆ

おぼつたくも

ふゆ

あ

芳

侍人乃 侍れは

あしき

新中納言定家

月

あまは

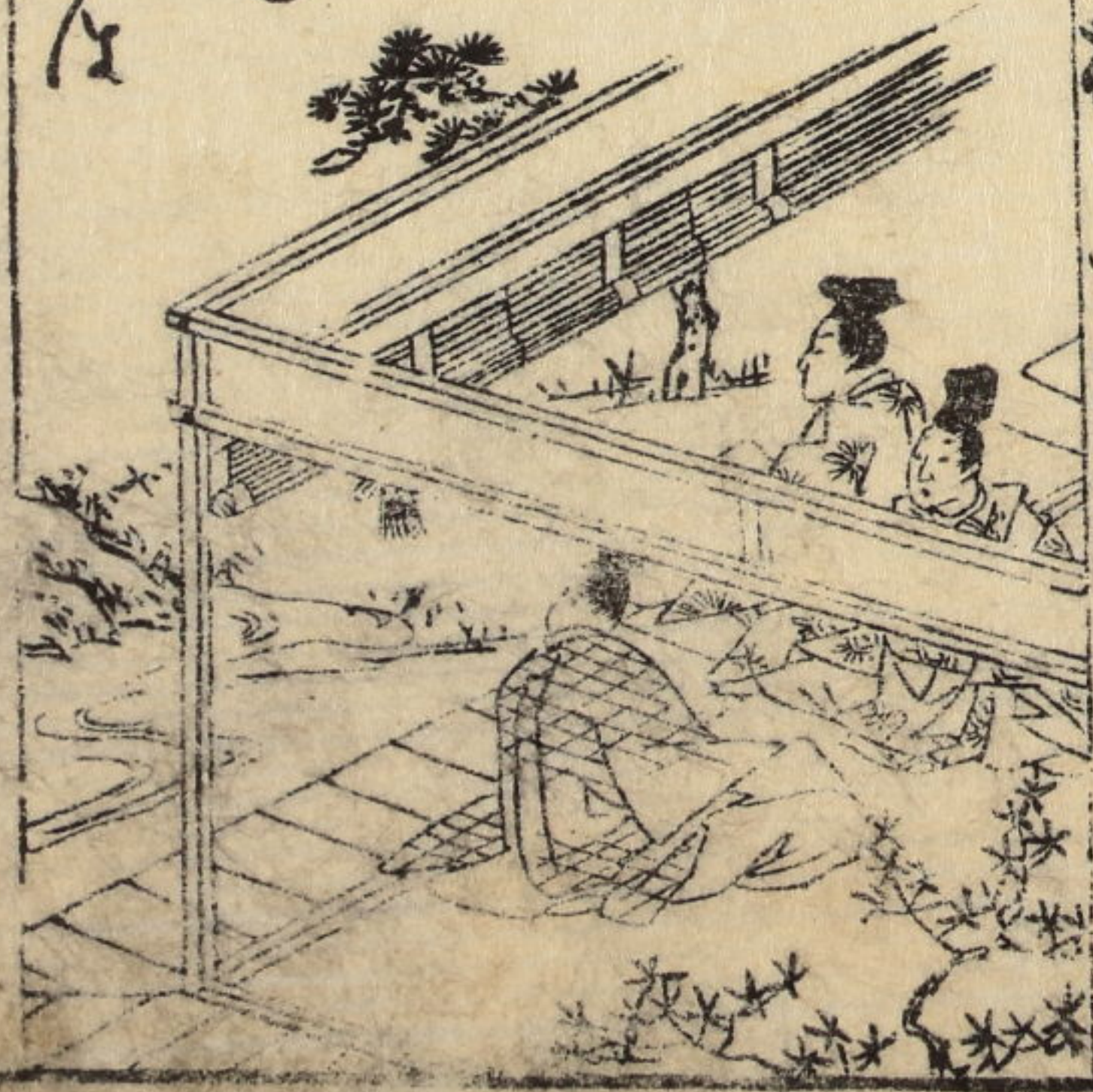
あまは

あまは

あまは

月乃

あしき



あしきの

あしきの

一編かほ勢考なり

我門よ

いふかほせなり

ひかり

風よ

乃ハ来よ

乃

雪

高砂の庵上

庵のちりぬり

月

あかめけおりのもさびくさくさ

月のおのりぬり

後二位家澄

ほり

栗

松の

白

て

乃

雪

乃

乃



みくられ翁の傳

一三人結翁は佐々

大の林れ沖事なり

又さうは三人なり

上智男命沖男

命海ら男命れ

事あらう沖事云く

かぞぬれは三命

れおれ

今年おい

花ぞ志まら

そとら難波の

蹴鞠奇三十首

宗世

かとうあーどばいさくあがる

まがあさねる下よれ

まおのよさうとてその

うさまらうのける

なれらら七間木四方

お生か松をぬ責れ

根れさまらりト申

青柳の底にまてる

さうれさうさう

松の回れり

人のまらる

三月のゆく春の
 四月も家の花
 五月の節
 六月のくさくさ
 七月のまじり
 八月のくさくさ
 九月のくさくさ
 十月のくさくさ
 十一月のくさくさ
 十二月のくさくさ



久我十
 入世の
 孫清通の

日申の節

頼田彦命
 藤原の節

かのゆきばの清の
 舟のゆきばの清の
 次ねのゆきばの清の
 いかのゆきばの清の
 又老くのゆきばの清の
 かのゆきばの清の
 又老くのゆきばの清の
 かのゆきばの清の
 又老くのゆきばの清の
 かのゆきばの清の
 又老くのゆきばの清の

三人の馬帽子
 ともも紅紫も
 柳
 鼻紙
 照指も刀も
 まよも丸も
 ながさの海
 正分れは
 ともも丸も

ついでに徳天皇佳吉
の孝考の所業平
供奉し奉りり家
町は徳伝くくしゆ
をこれ意風をよき
てよんあつて、ま
はるもふの林よ
ふよよそまのりり
我こそよひさく
如ぬすみよれ洋
の姫の川後世給ぬ
ら舞の林赤衣乃

云々
人れ身は付はりはらさりあし

はちこそしつらとねらふおろき
しん樹の向をさ枝らし

折れ下の鞠りぬ時を横さふ
丹智くとも色くさうりり

水れよりいよう落もまよひさく
海さばるう勢朝をれちり

折れくさいありちりり
ころよよりくもまちりあり

いほふほい二人を
塩りせよりもくも飛名風

童子と現形し
しつらよと君を
あつたの垣久
しふ世より経ひ袖
てき此船をあれさ
をくけを心その一日
神鏡かまれば二日
神霊かまれば三日
細川ささやう又の林
業更よさづけはる
ふれ書二巻方その
一日阿之巻二日玉之

あはむむつらうつ
あまはれるも君よめこそん

あんとりやうほなるうは曲是れ
中よもすりれえさうりり

あしほりや思ひうへとつら
思ふますつ結家曲とさ其さけ

あねまはれ馬都りといさ
唯曲是乃れどくある

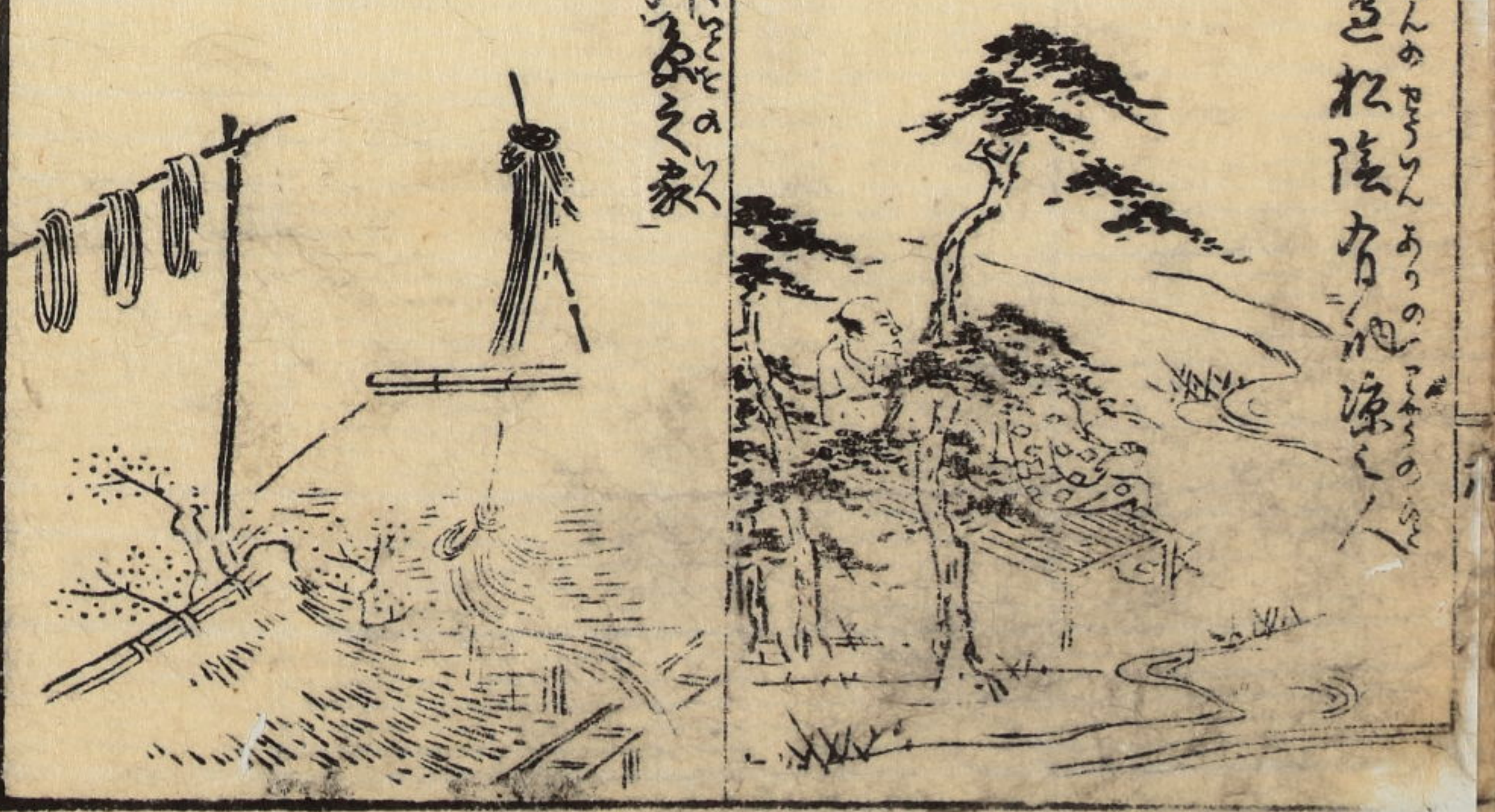
あまらりん思とさそきけ板あは
た一書ふらりり

いそびも体とついで今れ
刀とさるる俗乃れ

刀とさるる俗乃れ

千とのもちり鳴と
 或抄は満ちたりと
 あんと足はうぐいす
 次のもも郭公は
 とらふふ唯ふべ
 らるの志はくまを
 うまのいふもて
 あらばうもらわ
 ねの志はくまを
 ねとすらんやう
 うまのいふもて
 ねとすらんやう

玉産井
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃
 玉産の井乃



上合

茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言
 茶中絶言

松枝の

松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の
 松枝の



十一月二十日 千鳥群

十一月二十日
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群
 千鳥群



うめせし

互恵さけらる

流石のせしむる玉を
乳まらるるらり神は

んかううんや

ら秋のおよもくも

あうよたあ乃おはた

とやうんあうん

んかううんやんやん

あうすし神は玉は満

こいんあうん

あうさ今集録抄おはた

吉水郷 多人家 葉花臨池

いあ

あうん

後年 考へ

猪べし

大花山

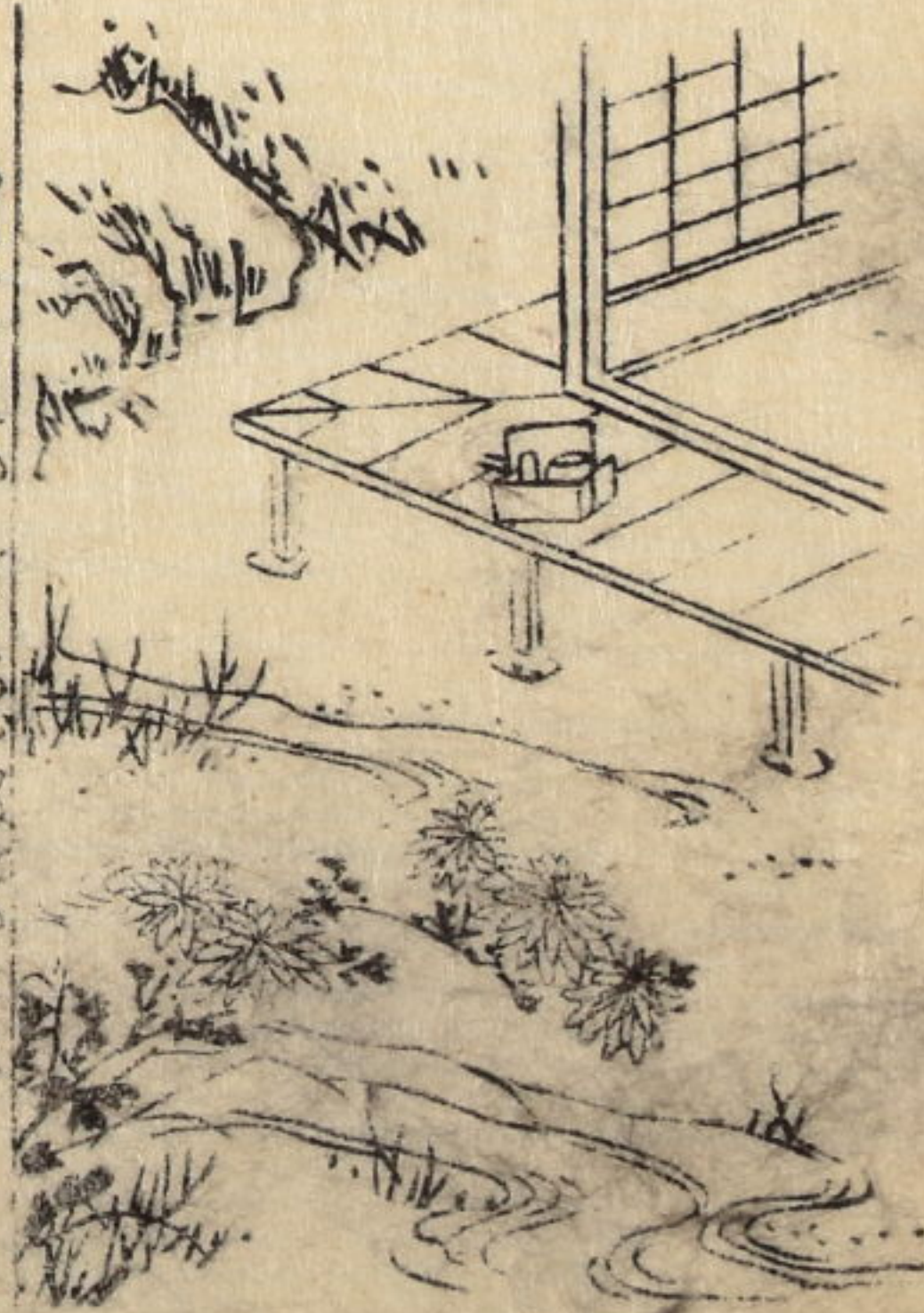
あうん

あうん

はのそそ

あうん

あうん



山脚民家多積箱之



四風之名不奇

万葉集の風 志を望む

神は久とあふ風

あうん

あうん

依保風 坂上あう

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

新續奇傳

後鳥羽院

ほあく

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん

あうん



あうん

伊香保風 人丸

いふ風 四々

ふね日 三々

ありとくと 三々

あふぬのこし

かえ草し草

夏野うん

紅 水とあててん

たごくを 鏡草

後藤保院

月と長梅の枝

櫓台ありや

なまよ

移るる房の

秋乃田れそは

六條宮

宗尊親王

絶くふれを

えそく 飛多丹

道助法親王

春日井み

まごりえ

中ぬ 若菜の

式子四親王

いふて世よあまも

人のほろこ

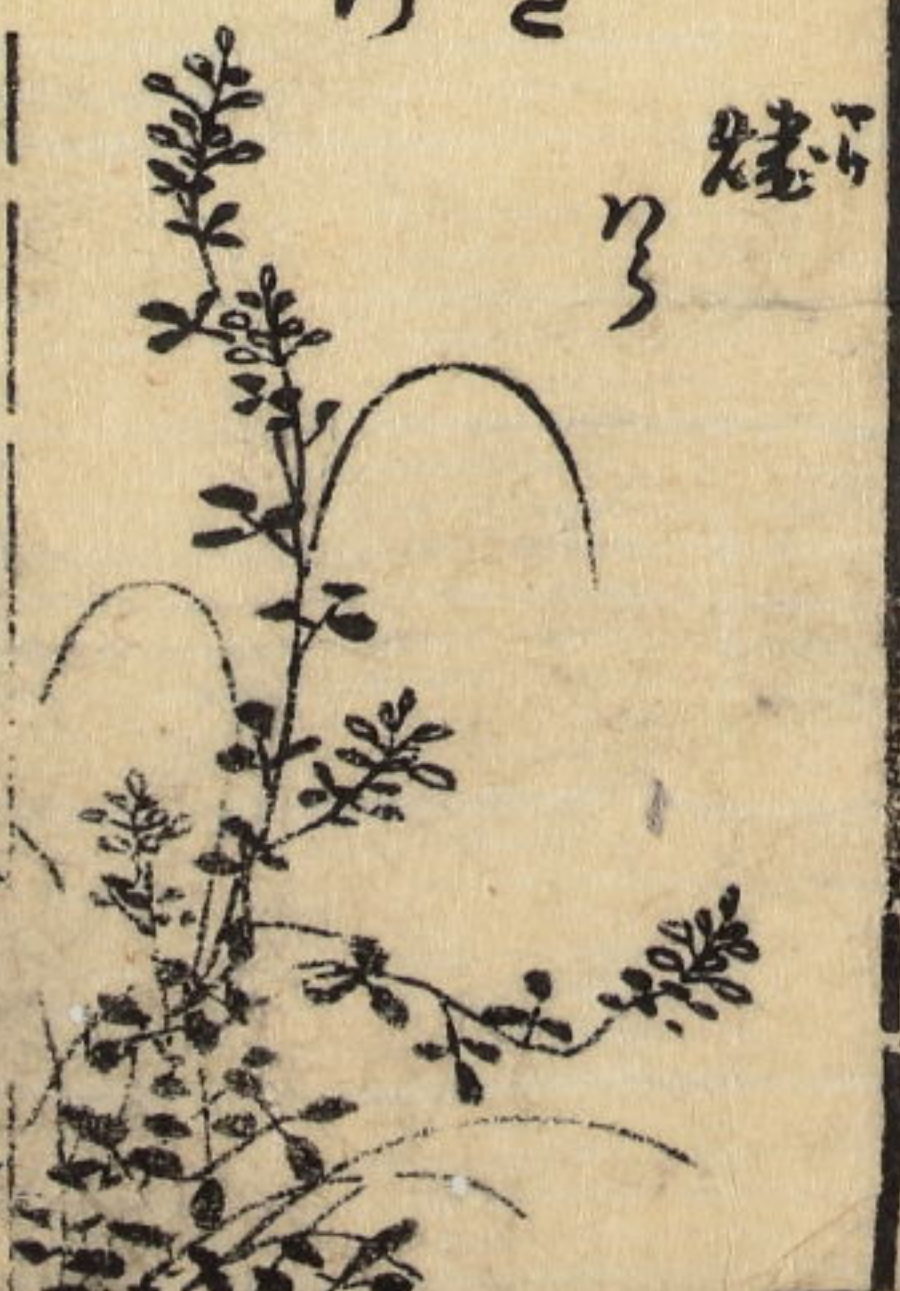
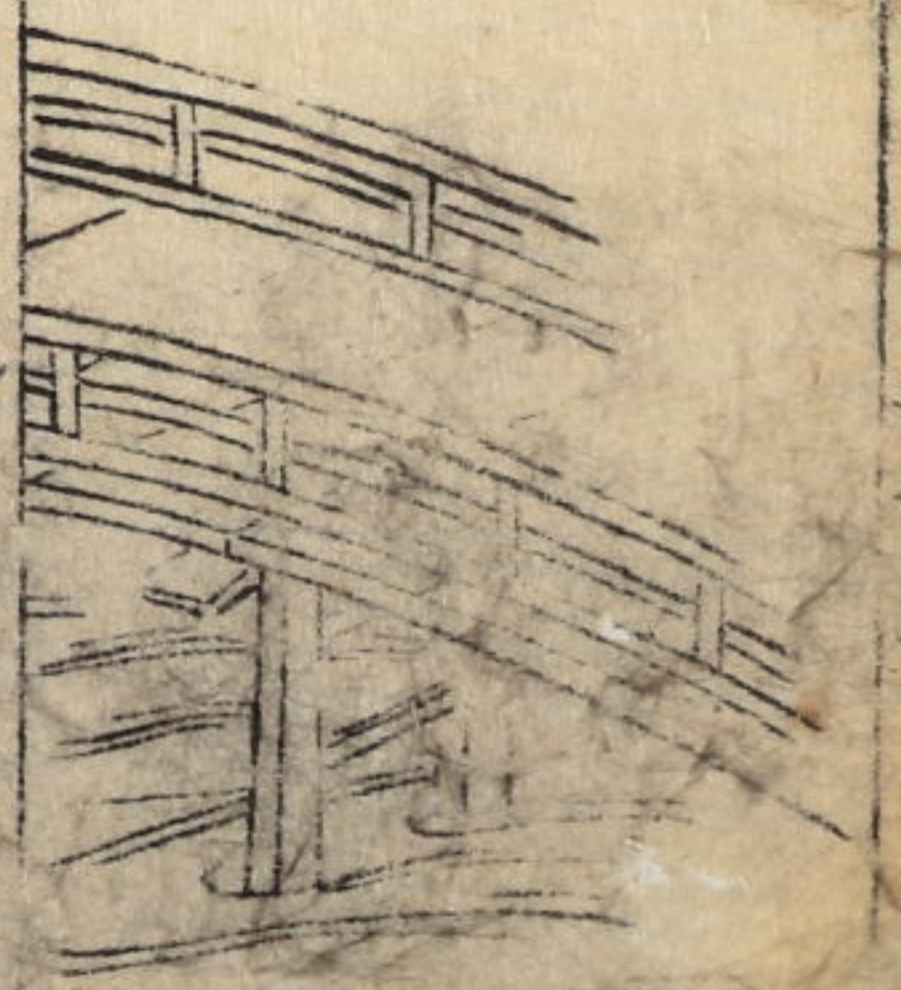
いふて世よあまも

後京極

人しゆぬ あけのら

ふれ岡やれ せれの

板心



撞

いさなぬれ 伝るる花乃

名残われし

ね

名残われし 月と

四季長名奇

あさよ月 春の初め

結下葉 藤の初め

むねはじらぬえ

はるの月 夏のはれ
はるの月 夏のはれ
はるの月 夏のはれ
はるの月 夏のはれ

きよなる川 秋のはれ
きよなる川 秋のはれ
きよなる川 秋のはれ
きよなる川 秋のはれ

ゆきざりの 冬のはれ
ゆきざりの 冬のはれ
ゆきざりの 冬のはれ
ゆきざりの 冬のはれ

光明寺 通家公
光明寺 通家公
光明寺 通家公
光明寺 通家公

後久我 通家公
後久我 通家公
後久我 通家公
後久我 通家公

富小路 安氏公
富小路 安氏公
富小路 安氏公
富小路 安氏公



四季の 花
四季の 花
四季の 花
四季の 花

春 花
春 花
春 花
春 花

夏 花
夏 花
夏 花
夏 花

富小路 安氏公
富小路 安氏公
富小路 安氏公
富小路 安氏公

九條基家公
九條基家公
九條基家公
九條基家公

花
花
花
花



唐紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

白紙 白紙

衣笠 田入

村の多敷 白紙

清乃 赤糸

無名

霜

山田

行童

伊勢

遠

通具

梅

春

冬

夏

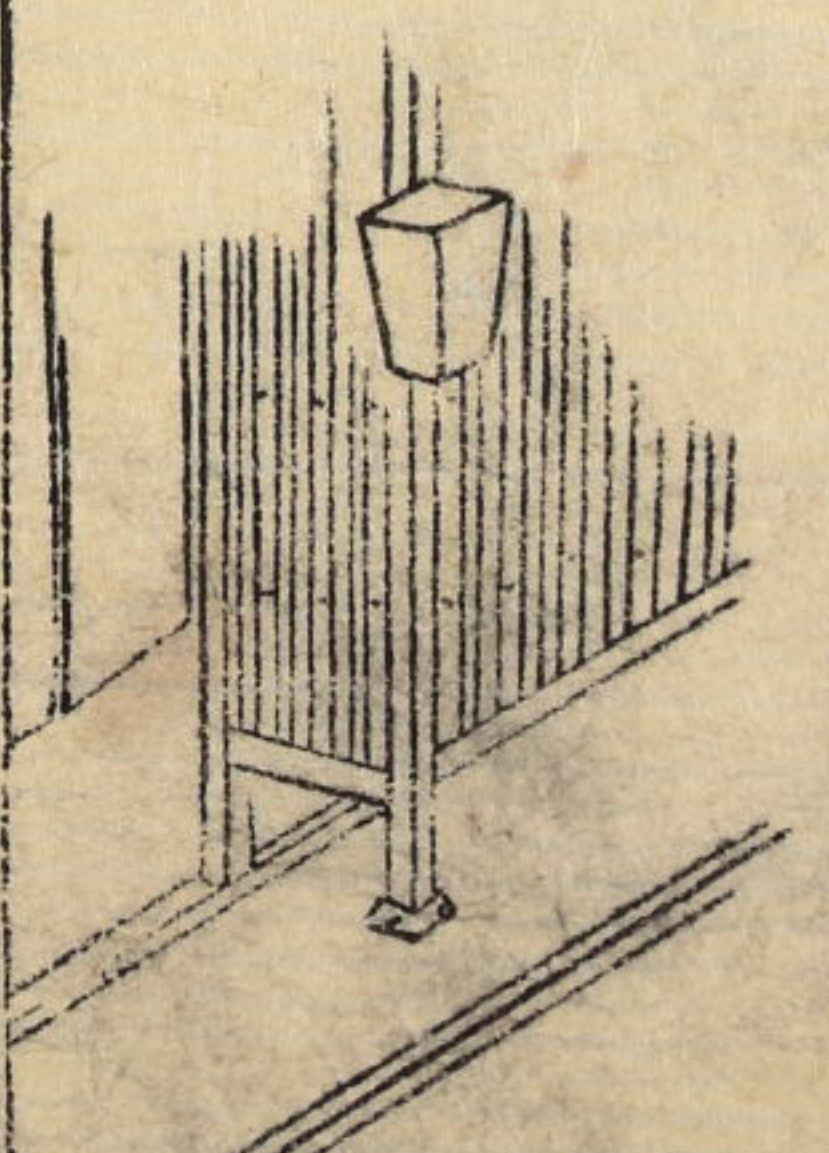
秋

冬

春

夏

秋



雪

みぞれのあつらひけ
しらふちふくしん乃
ゆきつらふくしん乃
あつらひけ

東
あつらひけ
ゆきつらふくしん乃
あつらひけ

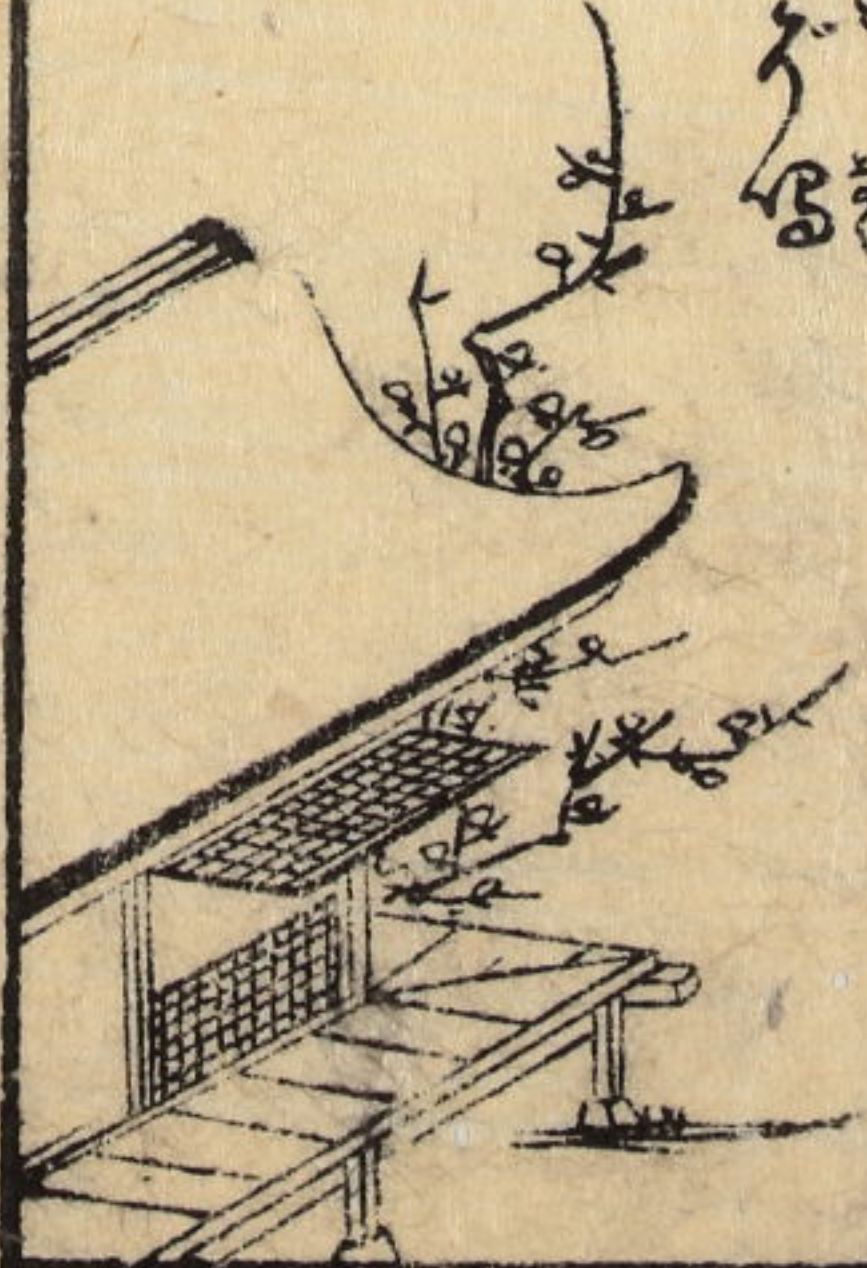
西
あつらひけ
あつらひけ
あつらひけ

知家

神月志之丸
あつらひけ
あつらひけ

有家
あつらひけ
あつらひけ

梅乃志之丸
あつらひけ
あつらひけ



南
あつらひけ
あつらひけ

あつらひけ
あつらひけ

あつらひけ
あつらひけ

あつらひけ
あつらひけ

信實

秋風
あつらひけ
あつらひけ

あつらひけ
あつらひけ

あつらひけ
あつらひけ



四月卯の花

あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花

名張あは
まの
卯の花
あまの
野れ
卯の花

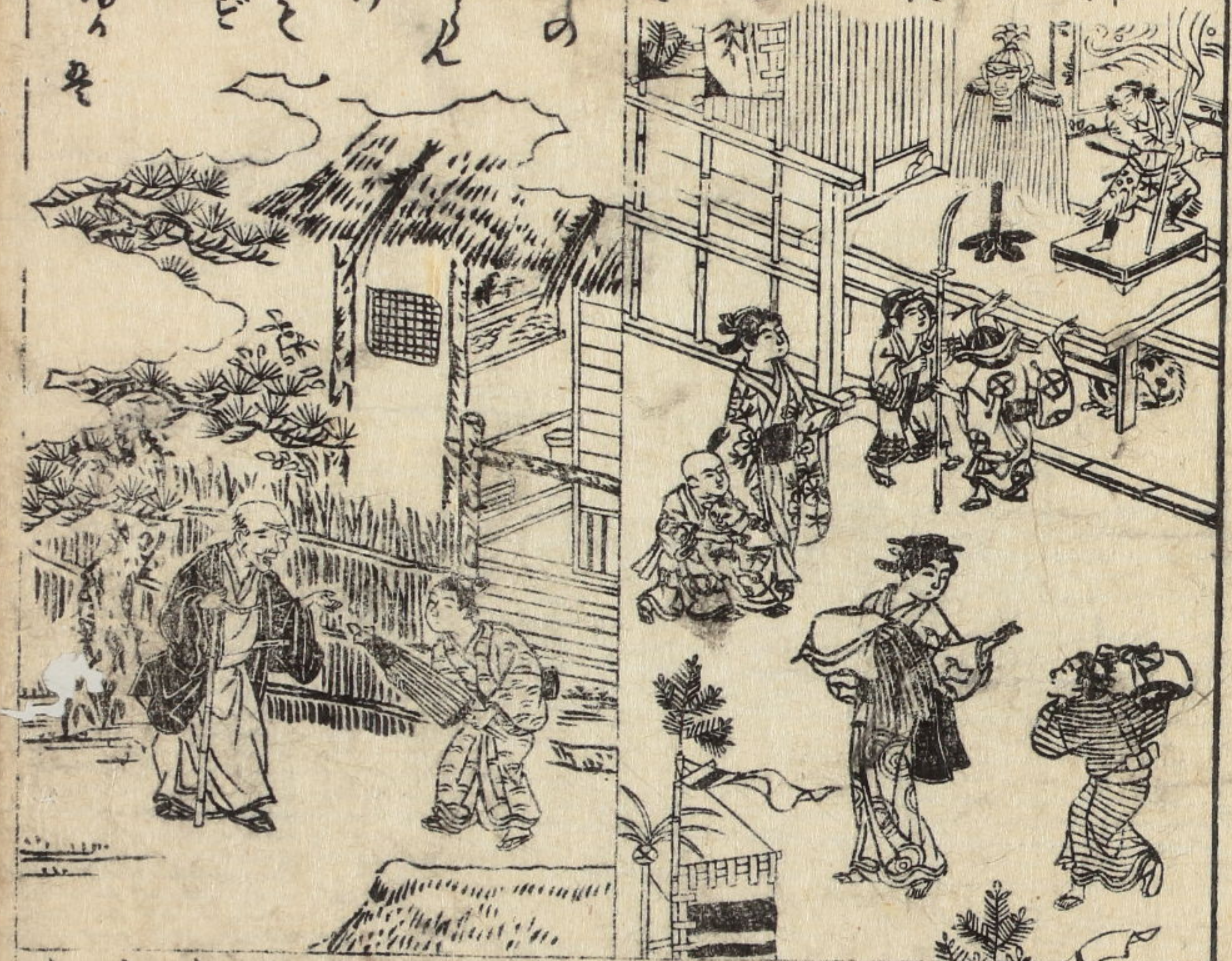


四月

あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花

五月

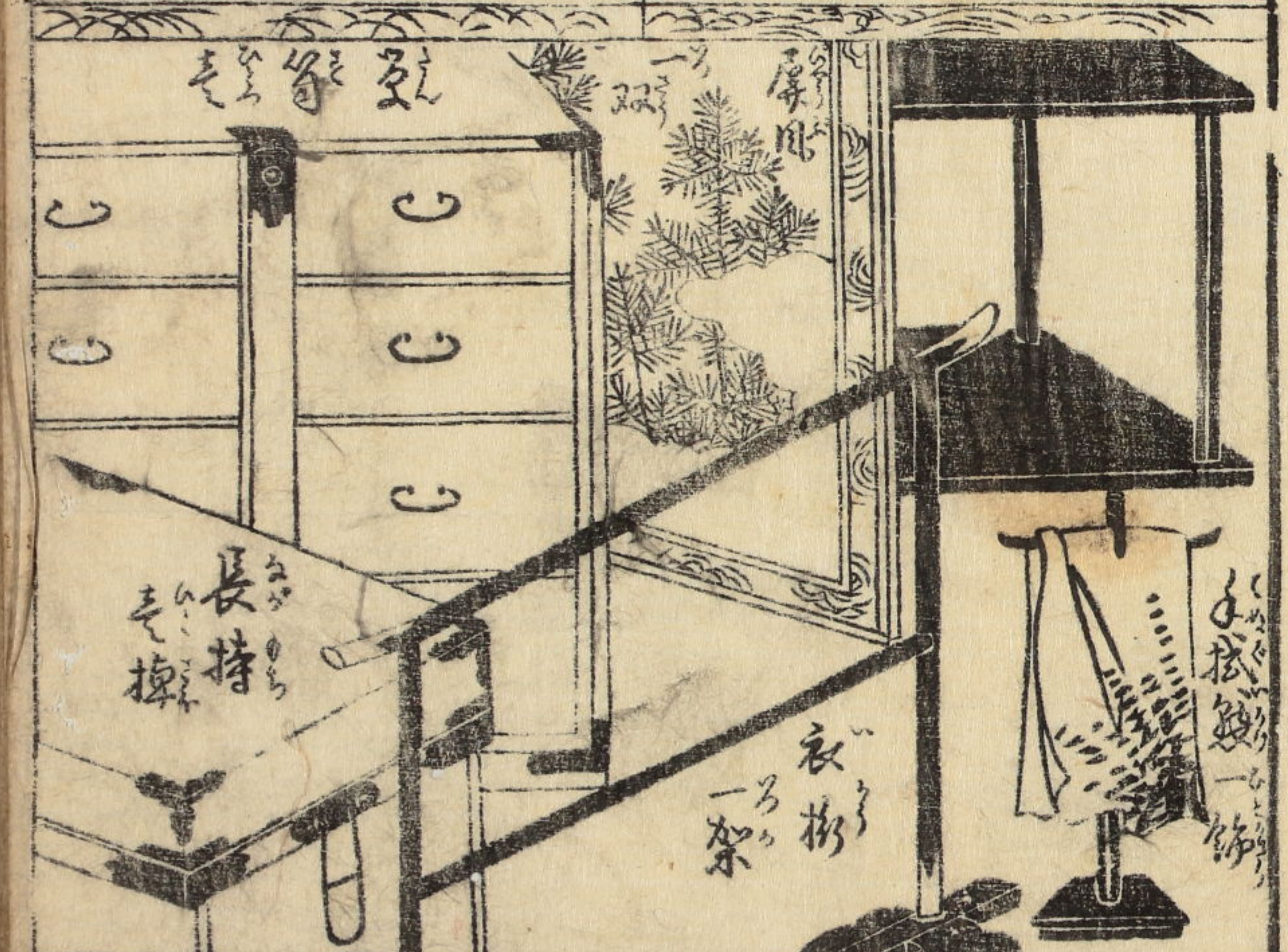
あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花



五月

あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花
あまの
野れ
卯の花

左中細言兼浦
 右中細言朝忠
 春
 長持
 衣掛
 衣架



長持
 衣掛
 衣架
 敷帳
 一帳
 一帳

左中細言兼浦
 右中細言朝忠
 春
 長持
 衣掛
 衣架



長持
 衣掛
 衣架
 敷帳
 一帳
 一帳

河原のたぐい
ふらのくれ
そのがら
けい
いれそめ
おさくくろふ



湯成院
けいを縁の
おつる
まね川
つりて
うらとたうわろ



中納言杉平
まろま
いの
まろま
まろま
まろま



光孝天皇
君がまの
の
つれ
おの
まろま
まろま



蝉丸
まろまこの
ゆも
ふも
つれて
まろま
まろま




小野小町
花のさ
うらま
まろま
まろま
まろま



懶風
おの
まろま
まろま
まろま
まろま



和四の
まろま
まろま
まろま
まろま



紀友則
 久々あしう
 のまき
 志れけふ
 しうらうあく
 花のらねん

藤原無凡
 休をき
 人ぬき
 多分の
 まらむれ
 友をたか

紀貫之
 人まじり
 ちりて
 ありさ
 ままじりの
 まふひ

清原深草
 夏の夜
 ちりて
 明あを
 影のふらふ
 月せらら

又屋朝康
 志く
 秋の群
 ねきとあ

若迎
 人のあ
 ねきとあ

冬儀等
 あさ
 人の
 ねきとあ

平兼盛
 思ふれ
 ねきとあ
 人のあ

二

三



常孫好忠
由良のそと
うらな
り
あつた
あつた

謙徳
人
あつた
あつた

海老
風をいひ
あつた
あつた

忠孝法師
あつた
あつた

壬生忠見
あつた
あつた

清系え捕
あつた
あつた

中細玄羽忠
あつた
あつた

あつた
あつた

紫式部
 めぐりあはく
 へしやそれる
 らるる
 新かたの
 新かたの
 新かたの



大貳三位
 新かたの
 新かたの
 新かたの
 新かたの
 新かたの



赤深
 や
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



小貳位内侍
 大貳位内侍
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



伊勢大納言
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



清少納言
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



左京方
 今
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



中納言
 今
 らるる
 らるる
 らるる
 らるる



七

高砂乃
おのれ
さう
あまの殿
きんぐもあま
茶中知言道房



源後ね
うりもは
んを
まの
ふら
うり
いの



藤系基俊
あまの殿
あまの殿
あまの殿
あまの殿



新田元系
法持寺入道希円白大政大臣



崇徳院
源
あまの殿
あまの殿
あまの殿



左京大夫
松風みき
あまの殿
あまの殿
あまの殿



源
あまの殿
あまの殿
あまの殿
あまの殿



待賢門院
あまの殿
あまの殿
あまの殿
あまの殿



後徳大寺大徳
 いそぎん
 まさつる
 うきと
 かしら
 きりぎりす
 かしら
 かしら

通因法師
 けしき
 さそも
 今
 のそ
 うきふ
 まさつる

皇太后
 世の中
 まなれ
 かしら
 かしら
 かしら

藤原信實
 まなれ
 かしら
 かしら
 かしら

後徳法師
 けしき
 さそも
 今
 のそ
 うきふ
 まさつる

新達法師
 けしき
 さそも
 今
 のそ
 うきふ
 まさつる

西行法師
 けしき
 さそも
 今
 のそ
 うきふ
 まさつる

皇太后
 世の中
 まなれ
 かしら
 かしら
 かしら

式子内親王
玉の御よきまを
さよまきしんを
ふのちり
よろ
しぞ



般多の流太極
ん多なる
あまれ
神さそ
ぬまらぞ
なれし
いりり



神のいねい
はるまき
さし
あはの
さし
後条極務政前大臣



二条院後
我神を
あはれ
神のふけ
人
かき



強倉右大臣
世の
つ
か
は
ほ



前大臣
あ
う
ま
あ
ま
ま



天皇
み
の
は
ら
あ
あ
あ

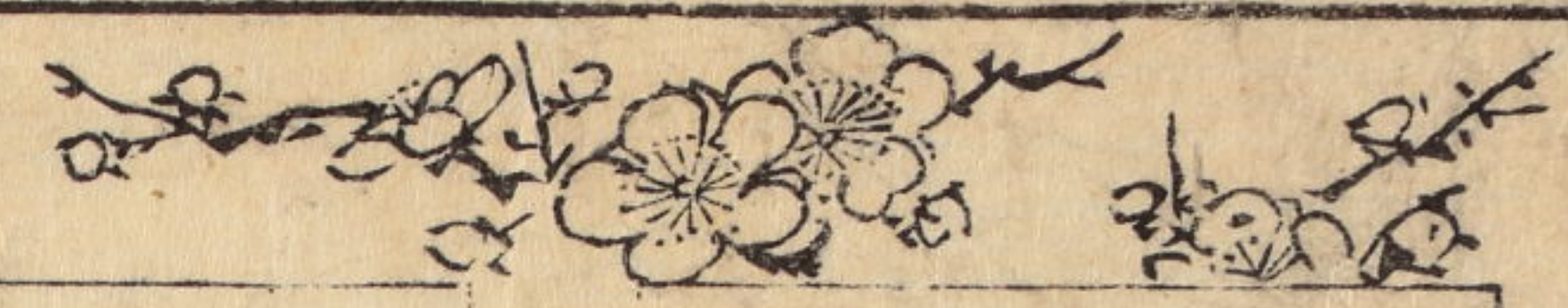


入
あ
あ
あ
あ
あ



510
70

信名七福具展



中細云定家



あまのりとの
あまのりとの
あまのりとの

二三位家隆



あまのりとの
あまのりとの
あまのりとの

後鳥羽院



あまのりとの
あまのりとの
あまのりとの

徳院



あまのりとの
あまのりとの
あまのりとの

